インターフェースを持った学生を育てる

田中和世
図書館情報メディア研究科教授

話せる側の立場から見ると

イランのパーレビ王朝が倒れたいわゆるイランイスラム革命のとき、米国の情報機関はその動きがあることをよく察知していなかったという。その原因の1つは、米国の情報機関が英語を堪能に話すイランの人たちに情報源の多くを頼っていたからだという話がある。これは、かなり以前、新聞か何かで読んだ話であるが、ありそうなことだ思い記憶に残っている。英語を母語とする、あるいは英語に堪能な人々は、当面の相手が話す英語がその人の思考を表しているという感覚に陥りがちである。英語が苦手なため英語に関してはかくいう私自身も、日本語で話すことを強いられる留学生に対応した場合などには同じような感覚をもつことがある。もちろん、冷静に考えればそれが誤解であることは理解できるが、多くの状況では人は初対面の短い時間に相手に対していろいろな印象を持ち、それがその後の付き合いに影響を及ぼす。事の善し悪しとは別に、ビジネスの世界ではこの時点で躓いては先に進めない。グローバル化が進む世の中で活躍できるようになるためには、およそ相手とのコミュニケーションに必要な外国語（多くの場合、英語）を習得しておくことが求められる。

平均的学生にとっては

一方では、（とくに海外で活躍されている人々からは）そうしたいわゆる英語会話能力などあまり重要でなく、その人がもつ本来の能力こそが評価されるという指摘がある。説得力のある話であるが、これは恐らく想定しているレベルが異なっているといってよいであろう。現状のままでも「世界に通じる」を目指す若者は沢山いて、彼らの努力を敢えてスポイルする環境はもはや現在の日本にはあまりない。ただし、そのような若者の割合は全体から見れば少数

である。ここでは、なによりも現在の大学生を想定してその平均的学生を対象として問題を考察したい。それは、今後の世の中の動向をみれば、世界に出て行けそうな学生の層が依然として少な過ぎると考えられるからである。

さて、英語によるコミュニケーション能力を身につけるということは、すでにさんざん議論されているし、わたしが新たに何かを提案できるというものでもない。しかし、多くの一般的学生にとって、それが簡単でないということだけは、わたし自身の経験に照らしても言える。何よりも重要なのは実際の場でいろいろな経験を積むということであろう。しかしながら、今の日本で、敢えて英語でコミュニケーションをとる必要がある状況はほとんど無い。世界的にみれば比較的安全で豊かな日本を出て、海外に生活の場を求めて行くという理由もあまり見つからない。自分の能力を高めたいという希望だけではインセンティブとしては弱いのである。

制度は作っても有効利用できるか

大学が、海外に出ることを希望する学生、たとえば交換留学生や研究発表する大学院生を支援する制度を拡充する。また、海外からの招聘教員を増やすなど、地道な努力も重要である。恐らくはこうした努力は進められるとは思うが、様々な方策が講じられても、それらを利用する敷居が高いと有効には活用されないということを強調したい。海外との関係では、往々にして多くの書類と、複雑な手続き、あるいは関係する教員に重い責任や事務手続きが求められるようなことも想像される。法人化された今後は、支援スタッフの確保や外部委託などによってこうした問題を解消していくことが必要であろう。

自分のインタフェースを持つ

話は少し変わるが、海外で通用するためにはもう１つ重要な要素があると常々感じている。それは一言で言えば、自分自身がもつ（相手との）インタフェースを明確にするということである。外国人から見ると、とかく日本人は個性が無いという話がある。むろん、そんなことはないが、元来が日本人の多くは自分の意図や内容を明示的に表現することが苦手であるように思う。あえて普遍させて言えば、日本人は伝統的に、説明的に明文化されたもの、もっと言えばマニュアル的なものを好まない。マニュアル的なものは多かれ少なかれ違和感のあるもので、それによって失われるものにこだわると完成しない。こうした姿勢が外見上の解りにくさを増幅している。

概ね、欧米社会においては、彼らが考え

て解り易いものが受け入れられる傾向にある（ここで「欧米」と特化するのは適当でないかも知れないが、世界のメジャーを構成しているという意味）。芸術、アニメあるいは伝統芸能など、日本発で世界でも高く評価されているものはたくさんある。しかし、多くは感性に訴えるようなものが多い。それでも、ある種の理解しやすさが強調されているように見える。その延長線上でいえば、海外においてコミュニケーションをとるためには、まずは、われわれが何を考えている、自分が持っているものが何であるかを相手に理解できるように説明する能力が求められる。多くの場合、われわれ自身が自分の説明にどこか違和感を覚えているのに、更なる誤解をもって相手に伝わるのが通常である。悪く言えば、彼らはわれわれの説明に勝手な解釈を加えてくる。英語で話す場合などには、日本人英語という引けた気持ちもある。それでもこういう状況に慣れることが重要である。（世界で使われている英語は方言だらけという現実もある。）

方法はあるか

それでは、多くの学生にこうした経験を積ませるにはどうすればよいだろうか？学生が英語でレポートを書き、英語で発表させるという少人数のゼミがあればある程度の効果を上げることができるだろう。しかし、このような授業を実現することが現状で可能であるかは実はよく分からない。たとえば、教員の側に英語に堪能な教員がいないとゼミの維持は難しいかもしれないし、また、教員の負担も小さくはない。いずれにしても、本来の目的からいって、大半の学生がこうしたプログラムに参加しなければならないというものではないし、教員も参加意思のある有志でよいだろう。不満足なレベルに終わらないためには、志気の高い学生だけが生き残れるプログラムでよい。テーマが往々にして教養的な題材になりがちであるが、発表者が学習する必要がある専門的内容を持つ題材であるほうが望ましい。こうしたプログラムで優秀な成績を修めた学生にはさらなる高度なプログラムへの参加の道を開くというのも動機付けにはなるかもしれない。重要なことは、多くの学生にそのようなプログラムへの参加の道が開かれていることを知らせることである。また、大学進学を希望している受験生に情報を与えて、受験者を集めることも人材の裾野を広げることになり有効であろう。

（たなか　かずよ／音声情報工学）